2024 年 4 月 27 日（土）

紫という色をめぐって

毎週日曜日の夜、NHK 大河ドラマでは『光る君へ』（脚本:大石静、主演:吉高　由里子）が放映されています。ご存知のように、これは紫式部の『源氏物語』を原作とした作品で、1000 年前の平安時代を舞台とした物語です。作者の名にある紫という色については、古い文献にも記載はなく、古代にはムラサキ *Lithospermum　erythrorhizon* という植物を使って、色染めしたり薬用として用いたとされています。

ムラサキは、もともと日本の固有種で全土に分布する多年草植物で、かつては山野に当たり前のように自生していたと言われています。草丈 40 ～ 60cm で 6 月頃に白い花を咲かせ、その根は赤紫色をしており、乾燥したものを「紫根（しこん）」と言います。これに含まれるシコニンが紫色を生み出すのです。最古の和歌集である『万葉集』には、ムラサキを詠んだ歌が 17 首もあり、身近に生育していたことを物語っています。中でも教科書にも登場し、末次 由紀の漫画『ちはやふる』（2008）で有名になった次の歌（巻一・20）でしょう。

ニホンムラサキ

茜（あかね）さす　紫（むらさき）の 野行き 標（しめ）の野行き 野守（のもり）は見ずや 君が袖（そで）振る　　額田（ぬかたのおおきみ） 王

【現代語訳】あなたが野原の『入ってはだめ』と禁止された場所を通りながら、あなたが私に袖を振るところを、野の見張り番が見てしまうわ

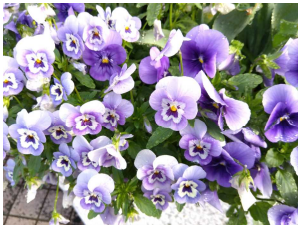
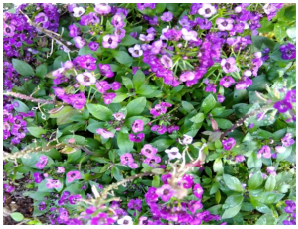
しかし、ムラサキの自生地は今では農地・宅地や雑木林にすっかり変わってしまい絶滅危惧種レッドリストⅠBに指定されています。聖徳太子が 603 年に制定した「冠位十二階」（643 年に改定「冠位十三階」とした中に色の指定はある）によれば、紫は最も高位とされ、紫の濃淡でさらに階位を分けていました。また、中国の前漢の時代:武帝（在位 BC141 ～ BC87）は紫を好み、天帝の色「禁色（きんじき）」としました。一方、今から 3600 年前頃、地中海沿岸地域で勢力を伸ばしたフェニキア人は、アクキガイ科のシリアツブリガイ *Bolinus brandaris* という巻き貝から取り出したムラサキ色の液を集めて布に染めつけ、高値で売買したと伝えられています。これを「フェニキアの紫」と呼び、英語では Royal　purple と言います。このように古代より、洋の東西を問わず紫色は高貴な色とされてきました。

紫という色は、波長が短く「虹の七色」の中では一番内側にある色とされて来ました。ただ、虹の色が何色に見えるかは地域によって異なり、アメリカやイギリスでは 6 色、ドイツでは 5 色、インドネシアで 4 色、台湾では 3 色とされています。日本でも江戸時代の浮世絵を見ると、絵師によって虹の色は異なり 3 ～ 5 色で描かれていました。ところが、江戸末期、1827 年に青地林宗（1775-1833）によって著された日本で最初の物理学書『気海観瀾（きかいかんらん）』には、虹の色は 7 色と記載があります。ヨーロッパではイギリスの物理学者として有名なアイザック=ニュートン（1643-1727）が、光と色に関するプリズムを用いた研究で虹は 7 色としています。

歌川 広重「東都名所　芝愛宕山之図」

これまで見てきたように、色は時代や地域によって異なり、科学の問題ではなく、文化の問題と言えるでしょう。『源氏物語』に戻って、五十四帖の物語には光源氏の愛した女人と装束、それにまつわる伝統的な色の世界が丹念に描かれています。特に、十二単（ひとえ）に代表される和服に特徴的な「かさね色目」という配色技法など、テレビドラマ制作者も色の世界をいかに表現するか、衣装担当や時代考証担当の皆さんは苦心されたことでしょう。こうして色の世界からドラマを楽しむのも、また新しい視点を与えてくれるのです。

戸外に目を転じれば、庭に咲く西洋的な紫色の花々がこのところの春の雨に濡れながら楽しませてくれます。移ろう季節と色の世界、古代と変わらぬ自然への憧憬を愛でつつ…。

校長　石飛　一吉